

第7章 悲劇

失敗談

人は成功したり、失敗したりします。他人に話をしたいのは成功した話だが、聞かされた方は、「また自慢話か」と思うだけで、感動の一つもない。それに比べて失敗談は、だれでも興味深く聞く。週刊誌が売れ続けるのが、そのよい例です。

失敗はだれにでも起こるからです。偉い人でも、自分と同じ失敗をします。しかし、偉い人の成功した話は、一握りの人の事で、一般の人には当てはまりません。ノーベル賞をもらった、宇宙飛行士になった、指揮者になった、などの華々しい成功の話は、特殊な人の特殊な話であって、聞いても参考にはなりません。一般の人には無縁の事です。遠い所の話にはほかなりません。

人に受ける話なら、自分の失敗談を話すのがいいようです。「うまくできませんでした」「このように失敗しました」と話すと、聞いている人の共感が得られます。成功は、その人だけのことですが、失敗は、だれにでも起きることだからです。

たとえば、日本人は『野口英世の伝記』が好きです。この成功者にも、失敗談が付いています。英世は幼い頃、囲炉裏に落ちて火傷で左手の五本指がくっついてしまった。十五歳の時、手術で指が使えるようになった。しかし、めざす外科医にはなれなかった。このハンディがあったので、一生懸命に細菌の研究に打ち込んで、研究者として成功した。生活費はいつもなく、「借りた金は返すな」の先がけのような人生だった。気のいい村の庄屋さんは、家が傾くほど援助するも、アメリカ帰りの手土産は、懐中時計一個だった。庄屋の家族が怒り狂った映画『遠き落日』は、日本中の人々が映画館に足を運んだほど、かつてない人気だった。英世は今、千円札の顔になっている

と知ったら、どんなに驚き、戸惑う事でしょう。伝記には、一般の人が共感する失敗談があるので長く愛読されるのです。このように、失敗談は成功談よりはるかに面白い。

電話詐欺

「おれおれ詐欺」が後を絶たない。それ以前は、「壺を買いませんか」「ピアノを買いませんか」「山を買いませんか」「東京のマンションはいかがですか」などと電話がかかってきたものです。私は、傾向を分析して対策をたて、電話がかかってくるのを待っていた。

するとある日、「奥さん、お墓を買いませんか」という電話がかかってきた。待ちました。私は用意していた次のような言葉を言った。「十万、二十万円の物を、電話で『では、それを一つください』なんて買う人はいませんよ」。すると、相手の方がうわ手だった。「奥さん、墓が十万、二十万で買えると思っているんですか」と言った。私はゾツとした。このような電話は、からんだりしない方が身のためだと思いました。家にまで押しかけて来られたら大変です。それからは、穏やかに「間に合っております。失礼いたします」と言う事に決めた。家族にも教え、みんなに復唱させた。夫が、「難しくて覚えきれない」と嘆いた。

また、別の電話がかかって来た。用意しておいた言葉、「間に合っております。失礼いたします」と言うと、今度は「何が間に合っているんですか」と、独特の口調で切り換えして来た。私は、ますますゾツとした。それで、家の電話は留守電とFAXだけの使用とし、会話は携帯電話を使うことにした。本当に恐ろしい事です。

ローン

「建てたばかりの家のローンがあるのに、リストラされた。ローンは払い続けなければならない。こんなはずではなかった。困った」と言うのをよく聞く。自己破産したり、自殺者やホームレスが急増している。

近年、人々が平気で口にするローンとは、「借金」の事です。では、ローンを「借金」に置き換えてみてください。「借金」は、口に出して言えない言葉です。昔は、貧しい人が「借金がある」と言った。貧しい人は、静かに目立たないように暮らしていたものです。しかし、今は人前で平気で「ローンがある」と言っではばからない。

一方、お金がある人は、「私は、お金には困っていない」と人前で平気で言う人がある。なぜ、お金があるのでしょうか。働いて貯金できた、土地が売れた、遺産を相続した、家賃が入るなど、さまざまでしょう。「ナリ金」という言葉もあります。この「金持ち」という人々に共通する事は、お金を貯めたから「金持ち」になったということです。どんどん使っていたら、「金持ち」にはなりません。つまり、「金持ち」は、「ケチ」なのです。「金持ち」は、人々から注目されます。本当にお金がある人は、一般の人とは所持金の額が桁違いです。彼らは静かに目立たないように暮らしているものです。自分から「お金には困っていない」などと言うことはありません。

土下座

テレビや映画のドラマでは、しばしば土下座のシーンがある。日本では、土下座をして「すみません。ゆるしてください。この通りです」と言うと、それで全ての事が終わる。だれも問題にしないのは、昔からある日本伝統の文化だからにほかならない。

平成二十三年(2011年)五月四日、東電の社長が、福島県内の自治体と避難所を訪れ、

福島第一原子力発電所の事故について、首長や住民に土下座で謝罪した。現実には社長が土下座をして詫びたからといって何も事態は進展しないが、それで、ひとまず終わった。

そんな折、焼き肉チェーン「焼肉酒家えびす」で、生肉の和牛ユッケを食べた九十人以上の人が腹痛、下痢、嘔吐の症状で緊急入院。集団生肉食中毒が発生した。内四人(子供二人、大人二人)が死亡。死亡者からはO(オー)111が検出された。日本では、O(オー)111での死亡者は初めて。これを受けて平成二十三年五月五日、フーズ・フォーラス社長が記者会見で土下座をして「亡くなられた方々、被害にあった方々には、できるだけの事をしたい。誠に申し訳ございませんでした」と謝った。しかし、亡くなった人の命は帰らない。かけがえのない命。社長が土下座をして、それで報道は終わった。

ユッケを食べて死亡した男児(六歳)の父親は「土下座されても、だれに謝っているのかわからないし、私たちには何も伝わってこない」と怒った。男の子は、亡くなる前、五分おきにトイレに行き、血便を出し、最後はトイレから出て来なかったそうです。

わが家の玄関でも土下座をした女がいた。女はいきなり「申し訳ございません。もうしません。このとおりです。ゆるしてください」「孫の代までかかっても、お返しいたします」と、巨体を丸め手をついて言った。弁護士と相談したが、家や土地を担保にした借金の証書がないのでは話にならなかった。騒ぎ立てれば、殺傷事件や放火に発展しかねない。弁護士は、「貸した金も財産とみなされ、税金の対象になります」と言った。この土下座事件は、それで泣き寝入りとなった。女が返したお金は、この時

の一万円だけ。

土下座で全てを御破算にする日本の文化に腹が立ちます。土下座をしても何も解決しない。

ウソ本

『癌は治る』のウソ

平成二十三年(2011年)四月二十一日、人気アイドル「キャンディーズ」の歌手スーちゃんこと田中好子が乳癌で亡くなった。三十代で発病し、約二十年近く再発を繰り返していた事は知られていなかった。

『癌は怖くない』、『癌は治る』などの本がベストセラーになっている。癌になった人は、ワラをもつかむ思いで買う。しかし、それはウソだ。「癌を宣告されたら、やはり死ぬ」。五十五歳というスーちゃんの死は日本中に衝撃を与えた。

平成十九年(2007年)四月、国立がんセンター名誉総長になった、垣添忠生^{かきぞえただお}も妻を癌で亡くした。「妻の症状は、つるべ落としのように悪化していき、十二月に入るとベッドから起き上がることもできなくなりました。・・・年の瀬が迫るにつれ、街は華やかさを増します。夜、病院から独り帰宅するたび、世の中の人がみんな幸福そうに見え、正直とてもつらかったですね。・・・私は癌の専門医であるのに、ただ脇で見守るだけでした」。妻・昭子は享年七十八歳でした(平成二十三年五月十六日 読売新聞『時代の証言者 がんと人生』より)。

『借りた金は返すな』のウソ

『借りた金は返すな』の本が出ると、たちまちベストセラーとなった。マスコミも、「そうだ、そうだ」とあおった。しかし、借りた金を返さなくていいような道徳は、

ありえない。私は腹が立ってしかたがなかった。案の定、この本を読んだ人が事件を起こし、関わり合いになったということで、警察沙汰となり、著者はマスコミから姿を消した。『借りた金は返すな』の本は、すぐに消えたが、このふざけたタイトルは、今も人々の心に残っている。編集者、出版社にも責任がある。

『捨てる技術』のウソ

いらぬ物は捨てる。簡単なようだが、必要な物と必要でない物を判断するのは難しい。現在必要でないと思っても、将来必要になるかもしれないからです。『捨てる技術』という本が出て、たちまちベストセラーとなった。物が溢れる世の中、みんなが『捨てる技術』を望んでいたからだ。『捨てる技術』とはタイトルもおしゃれ。

たとえば、俳優・船越英一郎(神奈川県足柄下郡湯河原町出身)の場合。出演した全ての台本を大切に保管していた。ある日、帰宅してみると奥さんに捨てられていた。奥さんは、掃除のプロとして売り出したタレント松居一代。船越英一郎は、頭を抱えてしまったそうだが、将来絶対に使わない台本なので、あきらめた。NHKテレビの番組の中でそう告白する船越は、本当に残念そうだった。奥さんは、頭を抱えている船越を見て、なんとも思わなかったのだろうか。平然と「きれいになったでしょう。いかが」と言ったのだろうか。私は、この時捨てたのは台本だったが、それ以上に大切な物を捨ててしまった気がした。「奥さん、それでよかったの?」と思った。

たとえば、作曲家の團伊玖磨(童謡『ぞうさん』が有名)の場合、彼は郵便物を受け取ると、まず「團伊玖磨」と正確に書かれているものと、そうでない物に分け、正確に書かれていない物は捨ててしまう。「名前が正しく書かれていない物は、自分宛てでないから」というのが理由。しかし、これには無理がある。「團伊玖磨」と正確に書ける人は少ないのではないだろうか。その都度、奥さんや秘書の人がゴミ箱から拾って、

事なきを得ていた。團伊玖磨のファンである私は、この話を聞いて、もし本当に大事なものを捨ててしまったとしたら、どうするのだろうと、本気で心配をした。変わった人だなあ、離婚した奥さんも再婚した奥さんも、秘書の人も大変だっただろうと思います。

世界的に有名になり、八丈島に仕事場として別荘を持っているような團伊玖磨だから何でも捨ててしまえるのでしょう。一円単位で生活している人だったらありえない事です。

日本には「もったいない」という良い言葉がある。『捨てる技術』の著者は、どう思っているのだろうか。『捨てる技術』の本は話題となり、やがて捨てられて、消えた。

『説教』のウソ

宗教の本も沢山出版されていて永遠のベストセラーだ。「ウソをついたらいけない」と人の道を説く。天国や地獄はウソではないのか。その本の著者たちは、天国や地獄が本当にあると思っているのだろうか。死後の世界があると思っているのだろうか。

手作り

「手作り」の良さを主張する人は多い。私は「そうかなあ」と思う。幼稚園で配布された冊子を手にして驚いた。役員さん達の手書きだった。私の文も掲載されていたが、私より下手な字だった。これでは、見ようによっては、この下手な字を私が書いた事になってしまう。当時、すでにパソコンの時代で、名簿や電話網はパソコンで作られていた。手作りの良さを主張する人にはこの下手な字の冊子を見てほしい。決してほめられたものではない。

手作りという言葉は、陶芸でもよく使われる。手作りの良さとは、世界に一つだけ

の貴重な物に贈る言葉にしたい。たった一度、幼稚園で配布されたその冊子は、手作りでしたが、「味わい深いもの」ではなかった。

いびき

夫はいびきをかく。隣にいる私は眠れない。「ゴーゴー、ゴーゴー、やめてくれる」と言っても、「うるさいよ」と言っても、無駄で、聞こえていない。手を握ったり、体を揺すっても静かになりません。

さらに、私に「気合が足りないから眠れないのです」と言う。「眠るのに気合だなんて笑わせないで。おかしくて寝られないわ」「まじめに取り組む努力にかけるから眠れないのです」などと教師のような説教をします。

朝、「寝言でこんな事を言った、あんな事を言った。だから全然眠れなかったわ。二時に起きて仕事をしたのよ」と言うと、「そんなこと気にすることはないんだよ。半分眠りながら、よく覚えているね」と平気です。

ある時、旅行から帰った夫が、「ホテルで同室の人のいびきがすごくて眠れなかった」と言った。「あなたよりすごい人がいるんだ」と言うと、「僕なんか、かわいいものさ」と平然と言った。

傾向がわかったので、対策をたてた。それは、私が夫より先に眠ってしまう作戦です。夫より先に眠ってしまうと、いびきは聞こえず、よく眠れます。「そうだろう。早く眠るのが一番さ。昔から言うじゃないか、早寝早起きってね」と夫が勝ち誇ったように言った。

白鳥の湖

娘たちが小さかった頃、松田町の町民文化センターに東京のバレエ団の『白鳥の湖』

が来たので観に行った。最初に「マイム」の説明があった。セリフのないバレエでは、登場人物同士の会話にマイムを用いる事がある。「結婚」とか「誓う」とか「愛している」など。結婚指輪を示す「結婚」のマイムは感動的だったので、よく覚えている。

「四羽の白鳥たちの踊り」「白鳥の踊り」「黒鳥の踊り」、王様と女王様が出て来て、「舞踏会の踊り」があった。「王子の踊り」になると、会場の子供たちがクスクスと笑った。見た事もない王子のタイト姿に、全員が釘付けになった。そのバレエ団には男子がその人だけで、時々ヨロヨロしながら、やっと踊り切った。私は、「まずいなあ」と思った。いつまでも、チャイコフスキーの音楽が耳に残り、ヨロヨロした王子の姿が目に残った。

小学生だった次女は感動して、すぐに友だちが通っているバレエ教室に入会した。練習は大変ということも知らずに、ただピンクのトゥシューズを履いてみたかったのだ。一年も経たない内に発表会があり、みんなで一曲、ソロで一曲踊る事になった。発表会には衣装代などでお金がかかった。会場には、家族やお友だちが来ていた。私も行った。終わると長女が「みんな下手だったね」と言った。

しばらくすると、神社の中の児童館でのバレエ教室はなくなった。薄汚れた小さなピンクのトゥシューズが残っている。この頃を境いに子供の数が激減したため、バレエ教室だけでなく、ピアノ教室も、そろばん教室、書道教室、スイミングクラブも徐々に衰退して行った。

ある日、私のピアノ教室の生徒の母親が、「来週は、家族全員で東京にバレエ『白鳥の湖』を観に行くので、ピアノ教室を休ませていただきます」と言った。「それはいいですね」。

そして後日、「バレエは、どうでしたか」と聞くと、「子供たちは、長かったので寝てしまったんです。お父さんは、先生に言えないような事を言ったんです。『股がよく裂けないなあ』って言ったんですよ。高いお金を出して、さんざんでした。』その一家は、しばらくすると名古屋に引っ越して行きました。今でもそのお母さんの言葉が耳に残っています。

パリ・オペラ座バレエ団の『白鳥の湖』のDVDを買った。有名だが、最初から最後まで観るのはこれが初めて。

夫は第一幕で寝た。「四羽の白鳥たちの踊りが、すばらしかったわ」「白鳥の踊りより、黒鳥の踊りの方がよかったわ」「黒鳥の三二回転がすごい」「悪魔のマントが不気味だった」

夫は、第四幕で起きた。「悪魔がやって来て、王子を倒してオデットを連れ去った。この後、どうなるの」と聞くと、「どうもならないさ、これでお終いだよ。救われない話さ。『白鳥の湖』は悲劇なんだよ」と言った。「こんな終わり方だって、知っていたの?」私は呆然となった。

夜、さっそく次女にメールをした。すると、すぐメールが来た。それには、「バレエの衣裳は可愛くて、私もバレエが好きです。昔やっていたしね。ハッピーエンド版もあるようです」と書いてあった。次女は自分がバレエを習っていた事を覚えていた。

からむ

じょうずに話が出る人は子供の時からの憧れである。これは性別によっても違いがありそうです。比較的男性は議論に強く、女性は弱い傾向にある。複雑な話題になると圧倒的に男性が話し、女性は聞き手にまわる。

大人になっても、その傾向は変わらず、話せる人は優位に立ち尊敬される。大学でも自治会でも企業でも家庭でも、そうです。

高齢になると、どうだろう。固定観念に縛られ、発想を転換できなくなる。かつて先頭を切って活躍していた男性でも、頑固おやじと言われるようになり、ついには嫌われる。病院や銀行や駅で、からんでいるのはほとんど男性です。

「病院で」からむ

病院の受付の若い女性にからんでいる男性がいた。

「いつまで待たせるんだ。予約をしたのに十二時を過ぎてしまった。掲示板が壊れてるんじゃないのか。全然番号が進まない。どうなってるんだ。だから、ここの病院は評判が悪いんだ。汚い言葉で、まくし立てている。「申し訳ございません。順番に診察しますから、もうしばらくお待ちください」。

このやり取りを、待合室の患者全員が見ていた。病院は急患が優先される。救急指定病院の場合、外来患者が待たされるのは仕方がない事です。忙しい受付の女性は、この男性の説得に長い時間を費やした。

「銀行で」からむ

銀行の窓口で若い銀行員に大声でからんでいる男性がいた。

「おめエの字が、きたねエからだ」「申し訳ございませんでした」。銀行員の男性は、ひたすら謝り続けた。同僚の銀行員は助けようとせず、各自が持ち場の業務を淡々とこなしていた。

このやり取りを客の全員が見ていた。誰もが見て見ぬふりをした。若い銀行員は、よく耐えていた。大勢の人の前で大声を出している男性は恥ずかしくないのだろうか。

「駅で」からむ

駅の改札で若い駅員にからんでいる男性がいた。

「切符を入れたのに出て来ねエ。なんで黙ってんだよ」、「・・・」。駅員は、ひたすら黙っていた。男性は駅員に殴りかからんばかりだ。

それを見ていた私が、「改札を出るのですから、切符は回収されるのですよ」と言うと、男性は無言で立ち去った。駅員は、それでも黙ったままだった。駅員にとっては、よくあることなのだろう。その場に残った私は、あきれた。

からむ「年頃」

夫に、この「からむ」話をした。

「からんでいる男性は、六十歳から七十歳ぐらいで、元気があるシルバーだよ」「そういう年頃なのかな」と夫が言った。「年頃」という言い方が、おかしかった。二人で大笑いした。私たちも、その「年頃」になった。

議論に強い男性が、賢く生きるには、頭が柔軟でなければならない。女性も聞き手にまわるだけでなく議論に参加できるように勉強しよう。賢くなろう。

お役所仕事

役場の介護福祉課に「還付金の振込通帳の名義人変更」の用紙をもらいに行った。

席を立てて窓口で対応した女性職員が、「今日は担当の者が、おりません。明日、電話連絡をしますから、お名前と電話番号をいただけますか」と言う。「私は変更の用紙をもらいに来ただけです」と言うと、男性職員と女性職員とで、左奥の棚の引き出しを探してから、「そのような物は、ありません」と言うので、「他の人は、どうしているのですか?」と聞くと、「電話で連絡していると思いますが」と言う。「通帳の名義人

を変更する手続きの用紙がないのですか。電話一本で変更できてしまうのですか。それは、おかしいですよ。もう一度用紙を探して下さい。』

そして、パソコンを見ていた女性職員が、「もう還付金はありませんから、名義人変更の必要はありません」と言った。「どうして、あなたに、これから還付金がないと、わかるのですか。それは、おかしいですよ。七月に決定し、通知があると書いてありますよ。その前に、通帳の名義人変更をしておきたいのです。私が言っている事が、わかりますか。』

結局、「明日、担当の者に電話連絡をさせます」ということで、名前と電話番号を書いて帰宅した。介護福祉課には他に何人も職員がいた。

翌日、留守電に「介護福祉課ですが、御留守のようですから、また夕方連絡します」という言葉が入った。すぐ、折り返し電話をすると、対応に出た女性が、「只今、担当の者は外出しておりません」と言うので、「今、電話がかかってきたばかりですから、呼び戻していただけますか?」と言うと、「外出してしまったので、それはできません。帰ったら連絡させます」「それまで、私は待っているのですよ。それでは困ります。』聞いていた夫が怒った。

「いつも、いつも、担当がいらないというのは何だ。その課の職員なら、担当者でなくても対応できなければいけない。石山さん（仮名）だけが仕事をしていて、他の人は仕事をしていないのか。町中の仕事を石山さん一人がしているのか。部長とか課長とか、上の者と話をさせて下さい。電話に出して下さい」「只今、席を外しておりますので、折り返しお電話いたします」「僕は、一円、十円の還付金がほしいと言っているのではなく、担当の石山さんがいないと、だれも仕事の事がわからないのは、おかしいと言っているのですよ。』

相手は「すみません」「申し訳ございません」と謝り続けた。「あなたを攻めているわけではありません。僕が言いたいのは、還付金がどうのということではなくて…」
結局、一時間待っても上司からは、折り返しの電話は来なかった。そこで、今度は私が怒った。

私がすぐに役場に出かけて行くと、介護福祉課の様子が一変していた。「昨日、振込通帳の名義人変更の用紙をもらいに来た池田です。先ほど電話をしました池田です。」
昨日とは別の男性職員が応対に出た。「しばらくお待ちください。」しばらくすると、用紙を持って戻って来た。続いて、外出していた担当の石山さんも、呼び戻されて帰って来た。石山さんが入ってくるなり「申し訳ございませんでした」と謝った。

しかし、「ちょっと、ちょっと石山さん」と呼ばれ、担当者の石山さんと、電話の応対をした女性と、今日窓口で対応した男性職員が奥で相談をした後、担当の石山さんだけが窓口に来て、「申し訳ございません。とりあえず、この用紙に書き込んでください」と言った。「私は、昨日も、この用紙をもらいに来たのですよ。用紙は、どこの棚の引き出しに入っていたのですか」「これは、パソコンから取り出すのです」「担当者がいないと、パソコンの操作ができなくて、取り出せないのですか。町中の人です。この課にいる人は、あなたがいなくても、だれでも対応できないといけないのではないですか。私は、昨日も、用紙をもらいに来ただけです。用紙を入れて置く棚を、百円ショップで買って来て、寄付しましょうか」「申し訳ございませんでした。他の者が、違うことも言ったようで」「今後、同じようなケースがあったら、課の誰でも対応できるようにして下さい」「わかりました。みんなに言っておきます」「私から一言、上の人に言ってあげましょうか」「いえ、私から、言っておきます」「そうですか。あなた、本当に上の人に言えますか。大丈夫ですか」「はい、今日は申し訳ございませ

んでした。御主人様にも、よろしくお伝えください。』

この件は、差し出された「振込通帳の名義人変更の用紙」に書き込んで終わった。住基カードの提示など身分の確認はなかった。「これは、何か変だ」。夫は、なかなか腹の虫がおさまらなかつた。

「これは非常におかしい。担当の石山さんは新入職員だったのか。石山さんだけが仕事をしていて、他の職員は何をしているんだ。職員は何人もいるんだらう。担当の仕事といっても、用紙をパソコンから出すぐらい誰でもできなければダメだね。説明と云って、『介護保険』『高齢福祉サービス』、たかが、この冊子一冊の内容だよ。職員の誰でも説明できなければダメだね。勉強不足もはなはだしい。聞きに来る住民のほとんどは、高齢で素人なんだから、納得がいくように、わかるように説明できないといけない。それが仕事だらう。ところで、課長や部長は、やはりいなかったのか。僕が直接、町長に訴えてやろうか。」

私は、これが世に言う「お役所仕事」と思った。介護福祉課は、町中の老人が、老人を抱えた家族が、相談に来る場所です。「すぐやる課」にするように改善を求めます。担当者が不在の場合、だれでも対応できるように研修をして、職員のレベルアップを求めます。これでは職員のレベルが低すぎます。

結果は最悪で、役場の職員に夫婦でからんだことになってしまったので、後々まで気分が悪かつた。相手の職員も同じだらう。

後日、忘れた頃に振込通帳の口座などを書き込み、印鑑を押す用紙が送られて来た。おじいちゃんには九四六円、おばあちゃんには七六七円の還付金があつた。これまでのやりとりが、すべて無駄であつた。私があの時、「これは、何か変だ」と思ったのは正しかつた。

団塊

「団塊の世代」この言葉が流行っている。「団塊の世代の退職」「団塊の世代に再就職はない」「団塊の世代には夢も希望もない」などと使われる。「我々、団塊の世代は・・・」と、一般的に使っているのは男性に限られるようだ。女性が使うのを聞かない。男性には会社があり、会社には定年があるため、一区切りがある。しかし、女性の家事労働には終わりが無い。女性も正社員として会社で働いている人があるが、団塊の世代という言葉は使わない。

この言葉は、哀れな響きです。それをテーマにして歌が作られた。当然楽しい歌ではない。団塊の世代の応援歌などありえない。それは哀しいばかりです。

私は、『おだわらシルバー大学』で歌唱の指導をしています。参加する生徒は、おおむね五十八歳以上の男女ですが、そのほとんどが女性です。圧倒的に女性が多い。「男はどうした」と言いたい。小田原の歴史、文学、手品、紙芝居、調理、話し方、昔の遊びなど、いろいろ学べる大学です。そこには、はつらつとした人々がいます。そうです。まだまだ、団塊の世代で、つまりいてはられない。

うそ話

松田山の道路工事現場のガードマンから身の上話を聞いた。およそ次のような話です。

「僕は、医薬品会社の営業マンで、いろいろな病院を回っていました。ある時、東京大学の教授に声をかけられました。『自分の研究している杉の木の入浴剤に投資しないか』と言うのです。入浴剤が話題になっている時期で、これから爆発的に人気が出るはずだと思い、東京の家を売って資金を作り投資しました。日光での事業は順調にス

スタートしたのですが、ある日、秋田の人が多額の注文をし、品物を受け取ったまま払い込みがありません。それを、何度か繰り返したので、会社は赤字となり倒産してしまいました。

自分は家族を抱えて無一文になり、会社再建のためサラ金一社からお金を借りてしまいました。取立て屋がアパートに来るようになり逃げ回りました。

そうこうしている内に、バーで出会ったヤクザAが、『俺が、その秋田の詐欺師を捕まえて金を返してもらって来てやる』と言い、すぐ住所がわかってお金を返してもらったのですが、ヤクザAは返してもらったお金のほとんどを手数料だと言って自分の物にしてしまった。手元に戻ったわずかなお金は奥さんに渡して離婚しました。息子が二人です。今は、二人とも成人して家庭を持っています。京都にいる奥さんの妹が良く面倒をみてくれて。・・・家族には、最後に会ってから、もう二十年以上も会っていません。

藤沢の土木会社に勤めて、きつい土木作業をして、それでもお金を貯めてサラ金に返しました。土木会社の社長が中に入れてくれて、もう全部返済しました。この社長がヤクザの親分Bだとは、知らないで、社長を乗せて車(リムジン)を運転していました。車の座席のサイドにピストルがガムテープではってあり、『これが本物ですか?こんなので人が殺せるんだ』と持った事がありました。この時、ピストルに指紋が付いた。

ある日突然、警察が僕のアパートに来ました。家宅捜索をされ、屋根裏からコカインが見つかったんです。それは、親分が昨日の帰りに隠して行った物でした。ピストルからは僕の指紋が出て。それで自分も捕まり、三ヶ月刑務所暮らしをしました。

「うちのおばあちゃんも、近所の女にお金を貸し続けてしまいました。女は、『金融七

社からお金を借りた事がある』と言っていましたが、家に平気で住んでいます。不思議でしかたがありません」「それは奥さん、あなたが悪い。取り立て屋を雇って返済をせまらないから」「とんでもない。そんなことをしたら火をつけられるし、一家皆殺しになってしまいます。無職の旦那とパートの奥さんじゃあ返済のしようがない。土下座して『孫の代までかかっても返済します』と巨体を丸めて謝っている姿が目焼きついて離れません。悔しいですが、しかたがありません」「誓約書が向こうに取られてしまっているのなら、そりゃあダメだなあ。私は泣き出してしまいました。

「ガードマンさんはこれからどうするのですか」「生命保険に入っているから葬式の代金には困らない」「東京の家で製薬会社の営業をしていた時が一番良い華やかな時でしたか?」「そうだね。背広を着て偉い医者とも知り合いになり対等にしゃべっていた。よかったなあ」「元々の原因になった東京大学の教授はどうされていますか?」「もう死んだよ」「悔しいとか思わないのですか?」「今は、もう何とも思っていないし、だれも恨んでいない。何があっても、もう恐くない」「ヤクザの親分は、どうなりましたか?」「また覚せい剤で捕まって刑務所にいるみたい。奥さんがそう言っていた」「凄まじい人生ですね。」

私が、あまり泣くので、調子に乗ったガードマンは次のような話もしました。「僕なんかより、僕のおヤジの方が、すごい一生だった。おヤジは遊郭を経営していたから、僕は小さい頃は贅沢な生活だった。ある時、ブタの輸出に手を出し、その事業は失敗で全財産を失ってしまった。そのガードマンは、前歯が一本しかない。苦勞の人生がうかがえました。

家に帰ってガードマンの話を夫にすると、「そりゃあ、その人の作り話だよ。よくもまあ、信じたものだね。お人好しと言うか、世間知らずと言うか、まるで少女じゃな

いか」「でも全部ウソとは思えないよ。薬の営業マンという職業もあるし、一時入浴剤も流行ったし、サラ金にコカインとくれば、ヤクザが絡む。ずっと昔、養豚ブームもあった」「きっと本当の話は最初の方だけだね。夫は、いい人なのに疑い深い。

退職

テレビを観ていると、親の介護を理由に三年、五年を残して会社を退職するケースが多いようだ。ゲストの発言の中に、「それはカッコいいことなんですよ」というのがあった。「そうか、ものは考えようだな」と思ったものの、収入が全く無い、年金の支給はまだ先となれば、なかなか「お父さん、カッコいい」とか、「自分はカッコいい」とは思えないものです。

登校拒否を起こした高校生がテレビで言っていた。「オヤジは退職して家でゴロゴロしているくせに、俺には学校に行けと、うるさく言う」と。

このような高校生こそ、登校拒否を起こして家でゴロゴロしている資格はない。高校生ともなれば、老いた親を思いやる気持ちが芽生えていなければいけない。

そのように教育できなかった責任は、当然、親にある。

仰天

人生は、仰天だらけです。

「ジョーズ」の仰天

一九七五年は、スティーヴン・スピルバーグ制作の映画『ジョーズ』が世界中を一世^{いっせい}風靡^{ふうび}した年でした。ポスターの宣伝は強烈で、だれもが映画館に足を運び、その映画を観た。サメが人を襲う場面が想像を絶していたので話題を呼んだ。私も家族と一緒に映画館に行き、サメの牙に血が付いていたので興奮した。

あれから三十年後、「ジョーズってすごかったわねえ。・・・」と話しているうちに、夫が「あのサメは、ゴム製だよ」と平気で言った。「えっ!」私は息ができないくらい仰天した。「そうだったのか」「本物のサメと思っていたの?」「あれって、ドキュメント映像だとばかり思っていた」「本物と思っていた事に仰天だよ」と夫が笑った。

私の落胆は大きく、立ち直るのに時間がかかった。そして、スピルバーグという映画監督は、すごいと思った。

ところが、その後、あるテレビのトーク番組で、俳優の高島政伸が、私と同じ経験を話した。

「僕は映画の『ジョーズ』を観て、すごいなあ、あんな映画を作りたいと思った。あの映画って、素晴らしいじゃないですか。それで、兄貴(高島政宏)に話したら、兄貴が『あのサメは作り物だよ。でかいゴム製で、特殊撮影なのだ』と言い出した、僕は本物のサメと思っていたので、ただただ仰天して言葉を失いましたよ。スピルバーグってすごいですよね。それで、映画を作るという考えはやめて、地道に俳優をすることにしました。今でも映画は作りたいと思っています」と言っていた。同じような人は、日本中に、いや世界中にいるに違いない。

スピルバーグ監督は、素晴らしい映画をたくさん作っている。たとえば、トム・クルーズ主演の映画『宇宙戦争』では、「死んでも生き残る」という名セリフを残している。家族を守る、アメリカらしい娯楽映画だ。

一九八七年公開の映画『太陽の帝国』では、日本に落ちた原爆投下の閃光が上海に届く。東の空一面に広がって自分に向かって来る光に少年が叫ぶ。「神様がカメラのシャッターを押した」。空に手を広げる少年の興奮は、日本人には異様に映る。これもアメリカらしい映画だった。

『太陽の帝国』に感動した私は、帰宅して夫に映画の話をした。翌日、夫は仕事の帰りに映画館に行った。映画はやっていたが、五分もしないうちに消された。映画館は真っ暗になった。受付で「まだ観ているのですが」と言うと、「誰もいないと思いました。すみません、今日は終わりです」という仰天の返事だった。翌日再び映画館に行ってみると別の映画が上映されていた。

後日、その映画館は取り壊された。客がいるのに平気で閉めてしまった時点で、この映画館は終わっていた。当然の結末だった。

「木枯し紋次郎」の仰天

童謡の会で、「NHK朝の連続ドラマ『おひさま』(平成二十三年四月放送)の初恋の人がハーモニカで『月の沙漠』を吹きましたが、あれは、あのハンサムな俳優さんが吹いているのではなく、実際は別の人の吹き替えです。童謡をハーモニカで吹くといいですね。ハーモニカの音色は、しみじみとして心に響く。よかったですよね」と話しながら、テレビドラマ『木枯し紋次郎』で、二、三歳の子役が「おっとう」と言うのを思い出していた。

その女の子の父親は早世し、女の子は父親の顔を知らない。そのため言葉を失い話せないという設定。紋次郎が、朝「どうか、達者で暮して下さい」と言って家を出る時、紋次郎の背中に向かって女の子が突然「おっとう」と呼びかける。母親役の藤村志保が「あの人は、カヨのおっとうじゃないんだよ」と言う。藤村のセリフには、紋次郎に対する淡い恋心が秘められている。

私が、「あの女の子のセリフは、グッド・タイミングだったわね。きっと何回も練習をさせられたに違いないわ」と言うと、夫が「あれは吹き替えだよ」と平気で言った。私は仰天した。今の今まで、子守カゴに入れられていた女の子のセリフとばかり思っ

ていたからだ。「女の子のセリフとっていたの?」と夫が笑った。そういえば、その女の子より年上の子供の声だった。

この回では紋次郎が悪に怒り、「バカヤロー!」と吐き捨てるシーンもある。無口で、もの静かな紋次郎には似合わないセリフにも仰天した。他のヤクザは使うかもしれないが、この安っぽいセリフは、きっと原作にはないと思う。

ゲストの「お筆」役の藤村志保は、好きな女優さんです（『木枯し文次郎』第4話「女人講の闇を裂く」）。

「織田信長」の仰天

ある日、織田信長は草履を履いた途端、仰天した。なま温かかったからです。そして、「サル、この草履はどうした」と怒鳴った。するとサルこと木下藤吉郎(後の豊臣秀吉)が「殿の足元が寒いと思い、草履をふところに入れて温めておりました」と言った。この「草履取り」の話は、忠義の物語として日本人なら誰でも知っています。

今日、私は靴を履いた途端、仰天した。なま温かかったからです。そして、「なに、これ?」と叫びました。まわりを見渡すと、野良猫の「ろくちゃん」が、ぼんやりとしていました。私の靴の上で寝ていたのです。

私は、仰天した信長の気持ちがよくわかりました。このなま温かい感触は、普通は耐えられません。怒鳴ったのも無理はありません。

疲れていた木下藤吉郎は、草履をふところに入れて温めていたのではなく、尻に敷いて休んでいたのです、きっと。与えられた仕事着(制服)が汚れては、もったいなかったからに違いありません。

「草履取り」の物語を作った人は天才です。木下藤吉郎を、賢い男に仕立てました。このようなドラマが多いほど偉人伝はおもしろくなります。たとえば信長の妹のお市

の方の「袋のネズミ」の話、石田光成の「三杯のお茶」の話などが、まさしくそれです。

ところで、私の靴の上に堂々と寝ていた野良猫の「ろくちゃん」は、時々餌をもらうのに何の恩返しもしません。「猫の手」を借りたい時もあるのですが。

「小田原提灯」の仰天

童謡の会で『お猿のかごや』を歌った。そして、小田原提灯の話をした。「新しくなった小田原駅にも大きな提灯があります。超特大ですね」と言うと、「えっ、ホント、どこに？」と言う声が聞こえた。私は仰天した。関心が無いと、あれほど大きな提灯が見えないのです。

「老人の言葉」の仰天

ある日、幼稚園に行く娘に、家で咲いた菊の花を持たせた。娘が花を持っているのを見た近所のおばあさんが、すぐさま「差が付くねえ」と言った。幼稚園のバスを待っていた大勢の若いお母さんたちも、娘も、確かに聞いた。そして仰天した。

私が小学生の頃、母が新聞紙に包んで花を持たせた。花は庭で咲いたダリヤやスイセン、ハナショウブなどでした。花は、どこの家でも咲いていたので、私だけでなく、どの子も花を持って登校した。アジサイの季節には、ほとんどの子が花を手で登校したので、バケツが廊下に並べられ、いろいろな色のアジサイで埋め尽くされた。それが普通の事でした。のんびりした時代でした。

ある日、私の家が組長になった。その係は順にまわって来る。ボランティアで組の人の世話をするのです。組の代表者だ。回覧板をまわしたり、集金をしたり、運動会の出場者を決めたり、家を出ず葬儀があれば、役割を分担したりする。

近所のおばあさんに挨拶をした。「今度、組長をしますので、よろしく願います」

と。これは普通の挨拶です。すると、そのおばあさんは、すぐ「オタクあたりじゃあ、みんなが先生をされているから、上手にやられるでしょうねえ」と言った。私は耳を疑った。復唱してから仰天した。

「すぐ言葉が出る」という事に、何より仰天した。用意をしていなければ、すぐに出る言葉ではない。普段、家で、または仲間と、このような会話をしているから出るでしょう。その人の人生観が出るのです。同じ言葉を浴びせられて世の中を生きて来たのかもしれない。しかし、品のない言葉は使いたくありません。普段から、品のある言葉使いを心がけたいものです。

「散歩」の仰天

ある日、夫を気軽に誘った。「今日は、秋晴れだから御一緒に散歩をするというのは、どうかしら。よく、前を旦那さんが歩いて、後ろに奥さんがついて歩いている御夫婦がいるでしょう。なかなか、いいと思うわ。御一緒に散歩をしましょうよ。」

すると、「いやだね。退職して家で一緒に暮らしている夫婦が、散歩の時も一緒だなんて、気がしれない。御一緒だなんて、お断りだよ。」私は耳を疑った。そして啞然となり、言葉を失った。

深い意味はないようで、それが何より証拠には、夫は自分で言った事を、すぐに忘れた。夕方になると、「ご飯の支度は、まだですか」と言いに来た。

「小田原かまぼこ」の仰天

小田急線の小田原駅上りホームのベンチに座っていると、後ろで女性二人の話が聞こえて来ました。東京からの観光客のようです。

「小田原は、かまぼこが有名よ。買った?」「今回は、買わなかったわ。前に来た時、買ったけれど、食べたら硬くて全部捨てたのよ。」

私は、その会話に仰天した。小田原かまぼこは、歯ごたえがあるから美味しいのだ。捨ててしまったとは、「もったいない」事です。

呪い

昔、呪いの葉書というのが流行った。「これは呪いの葉書です。受け取った人は、七人に葉書を出して下さい。止めてしまわなければ、あなたは死にます」という悪質なゲームです。

ある日、ある男がその手紙を受け取った。男は自分の父親が嫌いだったので呪いの葉書を父親に出すことにした。父親は、いつも頭の良い兄をかわいがり、自分はバカにされ比較されていたのだ。男はうんざりだった。男は躊躇せず葉書を投函した。

呪いの葉書を受け取った父親は、驚いて、なんと私に見せた。その葉書を見た私は、すぐに男の筆跡だとわかった。それほど下手で特徴があった。男の父親は「だれが、こんな物を書いてよごしたのだろう」と言い、警察署に行き事情を話した。それは、止める間もないほどのすばやい対応だった。警察では、今でいうと「パソコンに迷惑メールが来て、ウソの金の請求が来た」と訴えに来る人の扱いと同じ対応をした。それで、男の父親は満足して帰宅した。そもそも、わが子の筆跡を父親が気が付かないことが変です。そして「呪い殺してしまおう」と自分が育てた子供に思われてしまった時点で、父親は地獄に落ちてしまったようなものです。その父親は九十歳で亡くなりました。癌であった。その時、男は呪いの葉書の事は、とうに忘れていた。

呪いの葉書自体は、ウソで子供じみている。宗教には、このような要素が見え隠れする。父親が長男をかわいがるケースは、世の中にいくらでもあることです。それを恨むのは大人げない。人の寿命は限られていて、高齢になれば亡くなるのは普通の事

です。呪いなど無駄な事です。

死刑

大学の教養課程に法学があった。授業は教授が淡々と話し、それで毎回終わった。興味も無いため、面白くなかった。一年間の授業の後、「死刑について」のレポートを提出すると単位がもらえた。この課題は毎年同じだった。そこで、「死刑について」を考えてみた。加害者と被害者の立場から考えたが、結局結論が出なかった。私はそう書いて提出した。教授から特段の指導は無く、単位をもらった。それから今日まで死刑の是非を延々と考え続けている。

大学の授業では、社会学の集落と人の統計の授業、物理の音響学の授業、文学の芥川龍之介の短編の授業、ゲーテの詩集を使ったドイツ語の授業など、教養課程の授業は、みんな楽しかったのに、内容を覚えていない法学の授業の重い課題、「死刑について」を、ずっと考え続けている。

平成二十三年(2011年)五月二十五日、どの新聞も一面記事は、「布川事件再審無罪」の大見出しだった。

昭和四十六年(1967年)八月三十日、茨城県利根町布川で大工の玉村象天さん(当時六十二歳)の遺体が自宅で発見された。桜井昌司さんと杉山卓男さんが同年十二月、玉村さんを殺害し、現金約十万七千円を奪ったとして強盗殺人罪などで起訴された。逮捕から四十三年が経過した。四十三年もである。

裁判長は、「自白は信用性を肯定できない」とした。昔は、殴る蹴るの拷問が平気で行われた。NHK大河ドラマ『竜馬伝』では、土佐藩郷士・人切り以蔵が殴られ、吊るされ、拷問で死ぬ。口を割らなかったために毎週続くその拷問は、高齢の視聴者の

涙を誘い、「かわいそうになあ」「いい加減に、勘弁してやればいいのに」という感想になった。時代劇と違い、布川事件は昭和の話です。

再審の裁判長は、「客観的な証拠が存在しない」とし、無罪を言い渡して、この裁判は終わった。裁判は終わったが、被害者の大工さんはどうだろう。死体があったことは事実である。「死人に口なし」では浮かばれない。犯人は他にいる事になる。いったいだれか。犯人が逮捕されない限り、この事件は終わったことにならない。事件に時効はない。

ところで、長年勤めた法学の教授は、退職後、すぐに亡くなった。毎年集めた学生からの「死刑について」の論文は、どうなったのだろう。論文を集計したら、それはそれですぐれた資料に違いない。若者のその時代の考え方が見える資料だろう。

新聞のある投書のことを思い出した。次のような内容だった。「戦後まもない頃、家に二人の強盗が入った。私は縛られ殺されそうになった。強盗は食糧を奪うと、一人が『顔を見られているから殺してしまえ』と言ったが、もう一人が『殺したら死刑になる。だからやめておこう』と言った。死刑制度があったから、私は生き延びる事ができました」というものです。この投書を、死刑制度廃止論の人は、どう思いますか。

死刑に反対する人は、「廃止しても凶悪犯は増えない」と言う。この投書のように、凶悪犯にとって死刑ほど恐ろしい刑罰はない。

また、死刑に反対する人は、「死刑は残虐な刑だ」と言う。しかし、何も悪くないのに殺された被害者はどうか？死刑囚が被害者を殺害した時の残虐非道さは、絞首刑の比ではない。それは、一人でも多数でも殺した数とは関係が無い。近年、殺害された被害者が複数出なければ死刑が言い渡されないのはおかしい。

死刑に反対する人の中には、「誤審がある」と言う。当然誤審はあってはならない。

困ったことに、冤罪の話題は絶えない。痴漢や万引きなど死刑以外の刑罰でも同じで、誤判のないように、取り調べは録音・録画し、証拠は全面開示。正しい裁判・判決が望まれる。

「死刑にしても殺された人は戻って来ない。だから償いにならない」と言う人もいる。何も悪くないのに殺された人の無念さを思う時、死刑に代わる償いの方法があるだろうか?生きて帰らないから遺族は死刑を望むのです。遺族は裁判でも泣かされていいわけがない。

平成二十二年(2010年)七月二十八日、死刑執行に立ち会った千葉景子法相が青ざめた顔で力なく記者会見に臨んでいたのを全国民がテレビで観たのは記憶に新しい。刑場初公開もあった。私は正視できなかった。千葉景子法相は死刑廃止論者だったため、波紋がひろがった。

一年後の七月二十七日の神奈川新聞には、次のような千葉景子氏のコメントが掲載されていた。「死刑は裁判所が判決を出し、大臣が執行命令を出す。執行に当たっての責任は誰が負うのか。少なくとも最終判断者が状況を知らないのは無責任、国家権力として責任があいまいという違和感がベースにあり、執行を決断した場合には立ち会わねばならないと考えていた」「法に基づき、形式的には厳粛な形をつくっているにもかかわらず、ああいう非人間的で無機質な死に方、命の絶たれ方とは、何なのだろうと、非常に違和感を覚えた。これを死刑制度賛成論の人は、どう思いますか。

死刑の執行命令は、判決確定から原則として六ヶ月以内でなければならない(刑事訴訟法四七五条)とある。法相の義務であって思想信条に左右されることは許されない。ある法相は死刑を執行をするたびに「死神」と週刊誌の話題となった。逆に全く執行しなかったり、慎重な考えを示す法相も多いので、死刑囚は増える一方のようだ。二

○一一年十月十四日で未執行者百二十人。生活費、医療費は私たちの税金でまかっている。めぐりめぐって思いもよらない所で、私は死刑囚と関わっていることになる。これでいいわけがない。

死刑執行命令権は、いったい誰にすべきなのだろうか。現状維持でよいのだろうか。重いテーマ「死刑制度」に目をそむけず議論したい。

(註)死刑をめぐる情報公開と世界の死刑制度

- ・法務省は、1998年11月から当日に執行の事実と人数の公表を開始。
- ・2007年12月からは名前、犯罪事実などを公表するようになった。
- ・2003年に衆院法務委員会の議員が刑場を視察したことはあったが、刑場が報道機関に公開されたのは2010年8月が初めて。

世界の国または地域で、死刑制度があるのは九十四。すべての犯罪について死刑制度を廃止したのは95。制度のある94のうち、過去10年以内に施行があったのは47、執行がなかったのは47(2008年12月現在)。

七十五日

ことわざに「人の噂も七十五日」というのがあります。なぜ百日ではないのでしょうか。この数はどうやって割り出しているのでしょうか？

どんな所に行っても、噂話と言うものが出ます。人の噂をするのも七十五日ぐらいの一時的なもので、しばらくすると興味をなくして忘れてしまって、だれも口にしなくなりません。人の噂はそう長くは続かないということです。

日本語では七十五日ですが、英語では九日と、とても短いのだそうです。驚きます。受験の格言に、「浪人が決定すると非常に落ち込む。しかし、日数にするとたったの三

百六十五日である。人生の七十年からすると短い時間である」とあります。

人の噂はうるさい物ですが、そのうちにおさまってしまうから、いちいち気にしないほうがよい。それはわかっていますが、悪い噂ほどすぐ大げさに広まり、聞こえてくるように思えます。金融に勤める長女がオレオレ詐欺を未然に防いで神奈川県警から表彰され世の中の役に立ったという内容は話題にもなりませんでした。

娘たちも、七十五という数字を不思議がっています。「四十九日は死んだ後だよね」、「八十八夜でもいいのにな」と。そして、みんなで笑った。深刻な話なのに、わが家だと、なぜこうも楽しくなるのでしょうか。

太陽熱

近所の電気屋が「太陽光発電システムは、いかがですか。あまった電気は売ってお金になりますよ」とチラシを持って説明に来た。「太陽熱は、もうこりごりだわ」と夫に言うと、「昔の太陽熱と違うよ」と言った。どう違うのだろうか。

おじいちゃんは、新しいものが大好きで、ある日、農協から「太陽熱」を勧められ、すぐ買った。しばらくすると、物置の屋根に大きな水槽のお化けのようなものが置かれた。それが「太陽熱」である。わが家では、そう呼んでいた。「太陽熱」は大流行し、大小の差はあるものの、町中の人々が競って屋根に設置した。

これは風呂場に直結していて、夏は高温になり、そのまま風呂湯として使えた。半分おろして水で薄めても、まだまだ使えた。おじいちゃんは「熱い湯が、こんなに豊富に使える。こりゃあいいや。極楽、極楽」と大喜びだった。溢れるお湯がもったいないというので、犬が手ぬぐいを頭にさせられて、子供たちと一緒に風呂に入っている事も、しばしばだった。しかし、実際には熱い湯をぬるくするために沢山の水道水

を使う事になった。

冬になると、曇りや雨の日が続き、「太陽熱」は威力を欠いた。そればかりでなく、「寒い日や雪の日には、「太陽熱」の中の水を、全て湯舟に下ろすか捨てないと凍って爆発する」と言われた。冬は、風呂を立てない時もあるのに、毎日「太陽熱」の管理に沢山の水道水を使った。

しだいに、おじいちゃんも、おばあちゃんも、あきて「太陽熱」は放置された。この夫婦は、他の事でも、熱しやすく冷めやすいタイプだった。

すると今度は、「カラのまま放置して置くと、突風で屋根ごと吹き飛ばす」という人があり、おばあちゃんが、「他人に迷惑がかかったら大変!」と言い、使用しない「太陽熱」に毎日朝水を入れ、夜水をぬく事となった。大量の水道水が捨てられ無駄になった。

五十年も経つ内に、家の周りは新築の家ばかりとなった。ある日、道行く人が「太陽熱」を指さして「あの家には、まだあんな物が乗っているわ。新しい家が、古い家かは、あれが乗っているかどうかでわかるわね。あの家は、ずいぶん古い家よ。昔、農協にだまされたんだわ」と言いながら通った。

すぐに、物置の解体をした。大きな「太陽熱」の撤去には、大勢の仕事人がかかわって一日がかりとなった。おじいちゃんは、大きいものが大好きだったので一番大きな「太陽熱」を買ったのです。

「おじいちゃんは、だまされてばかりいる。私は、太陽光発電システムには、絶対だまされないわ」と夫に言うと、夫は「それって、おもしろい話だね。書いておくといいよ。「太陽熱」が屋根にあるかどうかで、古い家とわかる所なんか最高に面白いよ。それに人が成功する話より、失敗談の方が、ずっとおもしろいんだよ」と言った。私

は、さっそく書いておくことにした。

(註) 太陽光発電の買い取り制度 : 太陽光で発電し、使用せずに余った電力を電力会社に買い取らせる仕組み。設置費用が高額な太陽光パネルの普及を後押しし、二酸化炭素(CO₂)排出抑制^{よくせい}などにつなげるため、2009年に国が創設した。買い取り価格は経済産業省が決める。電力会社は買い取り費用を電力料金に上乗せするため、最終的には家庭や企業で負担することになる(神奈川新聞 2011年6月20日)。

台風

平成 23 年(2011 年)9 月 21 日、台風十五号が日本列島をゆっくり北上し、暴風雨が小田原地区を襲った。天気予報士は「猛烈」を連発して、通常の番組は天気予報に切り替えられた。小田急線が全線運休となり、酒匂川などの河川が増水するというので、小田原に避難指示が出され、長時間停電になった。東京でも電車が運休となり帰宅できない人がバスやタクシーに殺到して大混乱になった。そして多くの人々が死傷した。

台風が来ると、私は「伊勢湾台風」を思い出します。昭和 34 年(1959 年)9 月 26 日、小学校二年生(八歳)だったので、はっきりと覚えている。

台風に備えて、早く夕食をすませて蚊帳を張って寝ました。夜になると暴風雨が来ました。雨戸を叩き、戸袋が恐ろしい音を響かせました。私は怖いので、祖母(たつ)にしがみついていた。しばらくすると半鐘が鳴り、「松田の橋の近くの川音川の土手が切れるから、男の人は全員出て下さい」という町の放送があり、「俺も行って来ると言って、父がカッパを着て出かけました。

翌日、早朝の空は、雲に覆われているのに、頭上だけが、ぽっかりと青空があり静まり返っていました。母に、「これが台風を目だよ」と言われたのを覚えています。そ

れからまたひとしきり雨風があり、台風は過ぎて行きました。大勢の人々が死傷したようでしたが、私の町は、難を逃れました。家の庭に、バケツ、帽子、浮き輪、ビーチボール、Tシャツ、ザル、サンダル、下駄。いろいろな物が飛ばされて来ていました。郵便配達員が、「郵便が濡れてしまいました。すみません」と一軒一軒謝って配達していました。父が、「いいだよ」と言って受け取っていました。

「伊勢湾台風」以後、この年齢になるまで、それ以上に大きな台風に出会った事はありません。「伊勢湾台風」の時、天気予報の情報不足が指摘され、以後、頻繁に天気予報が放送されるようになったのだと聞いています。

(註)伊勢湾台風、昭和34年(1959年)9月26日に潮岬に上陸し、紀伊半島から東海地方を中心とし、ほぼ全国にわたって大きな被害を及ぼした台風。台風第十五号、国際名：ヴェラ〔Vera〕

親の責任

ある人が言った。「娘が結婚をしました。三十三歳です。子供を結婚させるのが親の最後の仕事ですから。これで一安心です」と。私は、「そうかな」と思った。

「子育ての最後は、自分が自分の親にした介護を子供に伝えるのが親の責任、親の最後の教育」だと私は思う。

私の場合、おじいちゃんとおばあちゃんが、おばあちゃんの母親(たつ)を介護している姿を見ていたから、今こうして、おじいちゃんとおばあちゃんの介護に向き合っている。おじいちゃんは、寝たきりの義母(たつ)を抱きかかえて風呂に入れていた。私は、それをしっかり覚えている。

おばあちゃんの妹は、同じ敷地内の隣の家に住んでいた。しかし、自分の母親(たつ)

の介護はしなかった。「イチゴをもらったから食べさせてやりな」「暑いから体を拭いてやるといいよ」と言って帰ってしまう。自分が脳梗塞で倒れ、介護が必要になった時、二人の娘夫婦は、「冷蔵庫にあるものを食べさせてやって。豆腐はあげるよ」「また来るからね」と言って帰って行った。自分が親にした介護を、子供は見ている、自分にしてくれるものです。

この話を童謡の会ですると、「自分の母は、朝一緒に食事をして、そして気がつくとうなくなっていた。静かな死だった」とか、「自分の父は酒飲みで、心筋梗塞でぽっくり亡くなった」「母親は百歳で亡くなった。時々見舞いに行ったけれど、介護は長女夫婦がした」という話が次々出た。つまり、介護をしたことがない人がいたのだ。しかも大勢。親の介護をした事がない人がいるとは思っていなかったので私は慌てた。

これでは、「子育ての最後は・・・」という私の話が成立しない。そればかりか、童謡の会で今まで話していた介護の話は一体なんだったのか。楽しく歌を歌おうと思って来ているのに、毎回介護の話を聞かされていた会員は、どう思っていたのだろう。重い気持ちで帰宅したに違いない。これから先も、自分が親の介護をする事が無い人なのに。以来、童謡の会で介護の話をしなくなった。

白い杖

朝起きると、新聞受けに新聞を取りに行き、読むのが日課です。投書欄は必ず読む。ずっと覚えている投書がある。

「駅の構内を歩いていると、突然何かにつまずいて転んだ。腰を打って立ち上がれない。前を目の不自由な人が、白い杖をついて行き過ぎようとしていた。つまずいたのは、隣から足元に突然出された白い杖だった。目が不自由なので、私が倒れている事

に気がつかず行ってしまった。私は今でも腰が痛くて普通の生活ができないでいる」というものです。

これは、目の不自由な人に責任は問えない。身体障害者に気がつかなかった、この人が悪いのか。普通に歩いている人の前に突然杖が出てきたら、どうだろう。だれでも転倒するに決まっている。この投書の人には本当に運の悪い人です。気の毒です。人の一生では、思いがけない事件が起きるものです。藪から棒という言葉があるくらいです。

どこで聞く歌か

歌手・秋川雅史が歌う『千の風になって』が大流行している。世の中、『千の風になって』一色だ。

パン屋での歌

パン屋に行った。パン屋で『千の風になって』のテープが流れていた。「私の御墓の前で泣かないでください。そこに私はいません。死んでなんかいません。・・・」

アンパンやメロンパンをトレーに取りながら、私は苦笑した。パン屋の奥さんが、「この曲好きなのよ。いい曲ですよ」と言いながら、パンを袋に詰めてくれた。

農協での歌

農協に行った。農協でも部屋中に『千の風になって』が流れていた。「この曲、やめた方がいいですよ。農協で流す曲としてふさわしくないですよ」と受付の女の人に言うと、若いその人は、「何の事？」という顔で隣の受付の人の方を見た。「そうですね」とは言わなかった。

歯科医院での歌

歯科医院に行った。ここでも『千の風になって』が流れていた。悪い予感がした。歯科衛生士の女性が「歯磨きの粉が顔に飛び散るので、布をかぶせます」と言って、私の顔に白い布がかぶせられた。異様な気分になり、フッフと笑った。口を開けているので何も言えなかった。磨いただけでその日の治療は終わった。

教会での歌

『千の風になって』は、一体どこで聴いたり歌ったりするのがよいのでしょうか。教会で歌うのは、どうでしょうか。

夫の歌

夫は、この曲がテレビから流れるたびに「発声が悪い。日本のオペラ歌手の代表と紹介されては困ります。この人がオペラに出演しているのを見た事が無い。実際にオペラのアリアが歌える発声とは思えない。喉を詰めているこの発声では」と言う。そして、真似をして喉を詰めて歌った。「私の御墓の前で」まで歌ったとたん、咳き込み、顔が真っ赤になった。「無理に喉を詰めて歌うからだよ」。

童謡の会員の歌

童謡の会員には秋川雅史のファンがいる。大勢の人がコンサートに行った。「最後にみんなで歌い、歌の指導もあり感動でした」と言う。童謡の会でリクエストもある。

平成二十三年(2011年)三月十一日、東日本大震災で大勢の人々が亡くなった。気が付けば『千の風になって』を聞かなくなった。「千の風」が止まった。

写真

住基カードを作るために、マーケットにある証明写真館で写真を撮った。インスタント写真だ。すぐに数枚の顔写真が出て来た。それを見て驚いた。そして座っていた

椅子から外に転げ出て、地面を叩いて笑った。しばらく笑いがおさまらなかった。

外で待っていた夫が、「見せてごらん」と言うので、「いやよ。見せたくないわ。世界最強よ。でも、住基カードは自分で持っているだけだから、これでいいわ。安物の写真だからしかたがないわ」と言って、マーケットで買物をして帰宅した。

帰宅してから夫に写真を見せると、「うーむ。目が垂れている。そのままだよ。でも、もっといいのを、僕が持っています」と言って、箱根の湿生花園に行った時の写真を出して来た。「この方がいいわ。よく撮れている」。それで、胸から上の部分だけ切り抜いて夫が貼ってくれ、町役場で住基カードを作ってもらった。夫が、「バックが白でないと、ダメかもしれない」と言ったが、もう私は聞く耳を持っていなかった。

私は、写真が嫌いです。自分としては「美人ではないが、かわいい」と思っている。しかし、写真になると、なぜか、女優の樹木希林や漫才の今いくよ・くるよのくるよに似てしまう。のん気な夫が「奥さんが、有名人に似ているなんて、なかなかいいです」と言った事がある。

写真が嫌いな事は、他人には黙っているのですが、童謡の会の会員から「先生と一緒に一枚撮らせて下さい」とか、「集合写真は、先生が真ん中ね」と言われ、頻繁に写真を撮られる。できた写真は、世界最悪で見られたものではない。これが全員に配られ、いつまでも記念として残るのだ。あきらめるしかない。我慢する。

娘たちは、私が写真嫌いだという事を知っている。「遺影の写真がないから、撮っておくといいよ」と言ってくれる。私も気になっている。その内、暇ができれば写真館に行こうと思っていたら、長年ひいきにしていた美容院が倒産し、さら地になっていた。別の美容院でカットしてもらったら、オカッパ頭にされた。目を開けて仰天したが、値段がいつもの五分の一の安さだったから、しかたがない。少し長くなったら写

真館に行こうと思っている。また、遺影の写真を撮るチャンスをのがした。

今日、テレビを観ているとハンサムな青年がゲスト出演していた。モデルとしてデビューし、今日から始まるテレビドラマに出るので、その宣伝のようだ。「もてるでしょうね」と司会者が言うと、「最近撮った免許証の写真がひどくて自分でもビックリした」と言ってその写真を見せた。証明写真館で撮ったインスタント写真だった。「うわー」「これって」「怖いよ」「ひどくねエ」と、みんなが騒いだ。私は、証明写真館が悪いと確信した。

虫に刺される

種や苗を売る店に行くと、農家の人がいたので、「ブヨとかハチに刺されたら、どうしておられますか」と気楽に尋ねた。すると驚くことに「そんなモノに刺された事が無い」と答えたので、話が続かなくなった。隣にいた人が「農作業を始める前に、まわりの茂みを棒で叩くようにしている」と教えてくれた。この人は大きな農家なのでしょう。わが家には叩くほど茂みはないが、夏になるとブヨやハチが出る。蚊取り線香では対処できないから、始末が悪い。ブヨやハチに刺されると、真っ赤に腫れあがる。刺された部分の筋肉が固くなる。いたがゆい。まぶたを刺されると目が開けられないほど腫れる。

ある日、まぶたをブヨに刺された。その顔を見た夫が「こりゃひどいね」と言った。翌日は童謡の会がある。この顔では大勢の会員の前に出られない。それで、二十四時間営業のマーケットに眼帯を買いに行った。眼帯をかけて練習したが、片目では楽譜がよく見えない。翌日、少し腫れが引いたので厚化粧をして行った。まぶたには、いつもより沢山のファンデーションを塗った。童謡の会は楽しく歌って終了した。やれ

やれと思っていると、帰りがけに「今日の童謡の会は最高でした。夫は無口で家では全く話す機会がありません。知っている歌を大きな声で歌えて、せいせいしました」と話しかけて来た人のまぶたが腫れていた。ブヨに刺されていた。

ある日、またブヨに刺された。耳を刺された。右耳が、いたがゆくなり、固くなり、大きく腫れあがった。ディズニー映画『ダンボ』は大きな耳で軽々と空を飛ぶ。ダンボもブヨに刺されたに違いない。「刺されやすいタイプですね」と夫が言って耳をもんでくれた。「気持ちいい。天にも昇る心地だよ」。

ある日、今度は唇の上と、^{ほほ}頬を刺された。唇は腫れあがり、口が結べなくなった。いわゆる「たらこ唇」だ。口が結べないほど曲がっているので、お茶がこぼれた。頬は固く腫れあがり、鏡で見ると刺された穴が見えた。ゾツとした。これは、「ひょっこ」とか、「こぶとりじいさん」だ。日本昔話の『こぶとりじいさん』は、茂みから鬼が酒を飲んで踊るのを見ていた。あれは、「こぶ」ではなく、ブヨに刺されたのかもしれない。私も、その場に居合わせたら踊ったよ。

しかし、何度もブヨやハチに刺されて学習すると、気がついたことがある。それは、三日もすると治ってしまうということである。刺されて三日後に夫に「いかが？」と聞くと、「なんともないじゃないか、いつもと同じだ。ブヨに刺されたことってあったっけ」と平気で言った。私は大事な童謡の会の三日前には草むしりをしないようにしている。

忘れる

マーケットで、美味しそうなリンゴを一個買った。半分に切ってから皮をむき、もう一度半分に切って、芯を取ってサラダの皿に置いて、食卓のテーブルに出した。あ

との半分は我慢できないので、皮をむいて芯を取らず、そのまま「ガブリ」と食べて終わった。魚を焼き、味噌汁を作り、お茶を入れたりしてから、「おまえさん、夕飯の支度が、できやした。冷めねえうちに食っておくんなさいまし」と夫を呼んだ。

そして、トルコ地震の話をしながらかし事をした。「東部のワン州の首都、ワン市が震源地で、ワン湖という湖がある美しい大きな町なんだって。クルド人が多いと言っていたわ」「家が、石でできているから、大変だ。日本人はどうかな」「報道が無いわ」など。

「あれ？サラダ全部食べちゃったの？そこにあったリンゴも、一人で全部食べたの？」
「これ、一人分と思った。あなたは、もう食べたと思ったから」「私は、リンゴを食べていないわ」「そうでしたか。ごめん。」「あ、いけない。リンゴは、むきながら先に食べたんだったわ。もう、ずいぶん前に半分食べたのを忘れていた」「そうですね。半分しかなかったから、これは僕のだと思ったから食べたんだよ。無実の罪だね」「すみません。痴呆が来ているかもしれません。よろしく。」

「僕なんか、いつも忘れる。忘れっぱなしだよ。あなたが痴呆になる頃には、僕はもういないから、子供たちによく頼んでおくんだね」「わかりました。食べたかどうか忘れるなんて、今、すごくショックだよ。落ち込んでいる」「そんなの、すぐ直って、ピンピンしちゃうだろう」「はい、そうです。」

だまされる

私の両親、おじいちゃんとおばあちゃんほど、他人にだまされ続けた人がほかにあるでしょうか。あきれた人生です。

だまされた「健康器具」

かたづけ物をしていると「交流高圧電界電位治療装置リブマックス 9000」という健康器具の取扱説明書が出てきました。宣伝文句には、「本当の幸福は毎日の健康管理から」と書いてあり、効能効果は、頭痛・肩こり・不眠症・慢性便秘・温熱効果となっています。

三年前に、近所のマーケットの仮設の建物の中でこの器具の説明販売がありました。一人十分ほど椅子に座って試してみる事ができ、男女の係員が健康について力説していました。それは一ヶ月近く毎日続き、試しにやってみようという人の長蛇^{ちようだ}の列ができました。

おばあちゃんとおじいちゃんも、もちろん毎日行って説明を聞き、洗脳されてしまいました。「買おうか、どうする？」と相談し、もうその時には、おじいちゃんが買うと決めていました。おばあちゃんは、おじいちゃんにしがいお金を出しました。それは高額で、普通の人には試しただけで買いませんでした。おばあちゃんの妹も、「針治療院に人が誰も行がなくなったってよ」と言っただけで、買うなどとは思いませんでした。

ところが、おばあちゃんたちは買ったのです。全く健康なのに長生きをしたいという願いを込めて買いました。私に内緒で購入し、だまって使っていました。「それは、何？」と聞いても、「なんでもない」と言い続けていました。

しばらくすると厭きて、大きな椅子は、ガレージに放り出され放置されました。器具の方もほこりをかぶったままです。健康そのものの人が使っているのですから、何も効果が現れません。つまらないに決まっています。最初からわかっていた事です。

その後、おばあちゃんは、また自分で気ままに散歩をし、おじいちゃんは、犬を連れて走り回りました。この方が、器具を使うよりずっと自然で健康的です。

失敗を認めたくないのです、おじいちゃんが言いました。「病気になったと思えばいいや」「そうね」と、おばあちゃんも言いました。いつもこの調子です。二人とも平気な顔をしています。何があっても驚かず、くよくよしないのが長生きの秘訣かもしれません。

「だまされてばかりの人生だね。これは、いくらだったの?」「そうだな。いくらだったかな。覚えてねえエヤ」と、おじいちゃんが笑いを浮かべて言いました。おばあちゃんは、何の事かしらという顔をしてだまって座っていました。その顔には、「面倒な事には巻き込まれたくありません」と書いてあります。

おじいちゃんたちは、ずっと小学校の教員をしていたので人を疑う事をしません。あの男女の販売員は、親切で良い人たちだと今でも思っています。世の中には、弱い人を食べ物にしている口の上手い最低の人がたくさんいる事をわかっていません。ニュースで報道される犯罪から学ぶべきですが、自分の事となると見えなくなってしまうものようです。情けない事です。

親戚の人が、私と夫に対して「あなたがた二人は、親で苦労するねえ」と言いました。本当にそうです。

大きな椅子と器具の処分に困りました。バイオテック株式会社の電話も FAX も通じません。パンフレットには値段が書いてありません。やはりだまされたのだと確信しました。これは、冷蔵庫などの粗大ゴミと一緒に出そうと思います。

だまされた「瓦」

玄関の天井が雨漏りをして腐り出したのでリフォームする事にしました。工務店の社長さんを先頭に、左官屋さん・建具屋さん・瓦屋さん・板金屋さん・大工さん・塗装屋さん・電気屋さんが下見に来ました。見積もりを出すためです。それぞれが、専

専門用語を言って、触ったり屋根に上がったたりして真剣に見ています。

左官屋さんが、「この家は築五十年ぐらいですか？」と聞きました。壁は、白に近い明るい色で仕上げてもらおうことにしました。

建具屋さんは巻尺で測って大学ノートにメモをしています。建具屋さんは母の教え子でした。「ここって先生のお宅ですよええ。僕は松田小学校で教わりました。遊びに来たことがあります」と言いました。

おじいちゃんたちに説明すると、おばあちゃんは即座に「そんなものやらなくていいよなあ」と言いました。おばあちゃんは、玄関などにお金をかけたくないのです。おじいちゃんは、「やってもらえ」と言いました。自分の失敗で雨漏りしているからです。

ある日、家に来た通りすがりの瓦屋に「屋根を見せてください」と言われ、言われるままに見てもらい、少し直して、百万円を払いました。その瓦屋は誰だったのかわかりません。直した部分から台風や、低気圧の通過などのドシャ降りの雨の時、雨水が吹き込むようになり、天井が腐り出しました。壁にも黒いシミができました。修理などしなければ、まだまだ大丈夫だったのに。今回屋根に上って見た瓦屋が、「こりゃ、ひどい仕事だ」と言いました。「ひどい仕事」という事は私が見てもわかります。素人の仕事です。おじいちゃんもわかっていました。わかっていたから今回「やってもらえ」と、すんなり言ったのです。でも、「だまされた」とは一言も言いません。認めたくないのです。

次の週、見積もりが出ました。梅雨明けから屋根に三日間、内装に三日間の予定です。

だまされた「布団」

おばあちゃんたちは、松田町であった自然食品の集会に行き、長時間座って説明を聞き、だまされて羽毛布団とマットレスを買わされました。さらに大丸真綿の社員が訪問販売に来て、羽毛布団とマットレスを買わされました。この時期、羽毛布団と厚いマットレスが大流行していました。それぞれ家族全員の分、六組ずつ買ったのですから高価な買物です。

厚いマットレスは、重くて取り扱いが大変です。背骨に良くないと聞き、すぐに使わなくなりました。羽毛布団はしばらく使うと羽が出てきて舞い上がり、それを吸うと体に悪そうなので使わなくなりました。処分に困ってそのままになっています。おばあちゃんたちは、だまされたとは思っていません。

「航空写真」の押売り

台風四号がゆっくりした速度で太平洋上を通過中なので、時々雨が降るとんよりした天気の日です。来客がありました。気のよさそうな優しい物腰の中年の男です。

「開成町で頼まれて、アジサイ祭りの会場や、瀬戸屋敷などの航空写真を撮りました。当日は、とてもよい天気の日で、埼玉の会社にすぐ帰ってしまうのはもったいないので、この辺を空から撮影しました。これは、お宅ですか？こちらは、お隣のようですが、写っている家を一軒々捜して見ていただいているんです。」男は、空から写した我家の写真と、隣の家の写真を見せました。二枚とも大きな額に入っていて立派な写真です。

「はいそうです。ウチです」「突然で驚かれていますと思いますが、記念にこれはいかがでしょうか？何も、強制ではありません」「買うんですか。いいません。この家は、私のものではありませんし、もうボロボロです。こんな写真を買ってどうするのですか。それに家と池の部分しか写っていないじゃあないですか。もっと下の畑もウチなんですよ。これじゃあ半分も写ってないです」「この家は、ご両親様の？」「はいそうです」

「ただなら、どうですか?」「いいません」「それなら、こちらで処分させていただきますが、いいですか?」「そうしてください。処分という言葉が「もったいないな」と、少し心を動かしました。押し売りの手口です。

次に、隣に行ったのでしょう。犬がけたたましく鳴きました。塩をまこうかと思いましたが、雨が時々降るのでやめました。

私がない時に男が写真を持って売りに来ていたらどうなっていたでしょうか。きっと、だまされて買っていたに違いありません。おじいちゃんが、「いい記念になる。いい物を買った」と大喜びしている顔が目には浮かびました。おばあちゃんも自分のお金を支払い、「安くてよかったわね」と。

最初から買うつもりがないので、値段は聞きませんでした。値段を聞かないのが押し売り退治の必勝法です。あまり過激な言葉のやりとりをすると、今時は殺される可能性があります。こんな事で殺されてはたまりません。

「両替詐欺」にだまされる

おじいちゃんが、「変だなあ。どう考えてもわからない」と言っています。私が留守の時、一人の男が玄関に来て、「一万円を千円に両替して下さい」と言ったのだそうです。おばあちゃんが、七千円を渡してから、「あと三千円足りないの」と台所にもどって、おじいちゃんに聞き、おじいちゃんが捜しましたが時間がかかってしまいました。男は、「じゃあ、コンビニで両替してもらいますからいいです」と言って帰りました。

おばあちゃんは、「七千円を返してもらったかどうかわからなくなった」と言います。おじいちゃんは、「台所にいたから、その男に会っていない。俺の男の声が家の中からしたから、慌てて帰ったんだ。俺がいてよかったなあ」と言います。

おばあちゃんは、最初に自分で持っていたお金がいくらだったのかわかっていませ

ん。お金の管理ができなくなっています。おじいちゃんは、おばあちゃんにお金の管理の一切をまかせています。それで平気です。

「七千円は、持って行かれちゃったんだよ。詐欺に引っかかったんだよ」そうかなあ。返してもらったかどうか、全然覚えがない。最初に出された一万円も受け取ったかどうか、わからない」「一万円は見せただけで、おばあちゃんが渡した七千円を持って行ってしまったんだよ。覚えていないの？そこのコンビニで両替をしてもらうのなら、わざわざウチに入って来なくてもいい事でしょう。また、だまされたんだよ」「そうかなあ。キツネにつままれたみたいだ。まあ七千円ぐらいなら、たいした事ではない。殺されるよりましだ。今どきは、すぐ殺すからなあ」「そうだなあ」おばあちゃんと、おじいちゃんは、そう言い合って納得しました。それでも、しばらくは不思議がっていました。

これは、今流行のオレオレ詐欺同様の詐欺ではありませんか。おばあちゃん達は、またしてもだまされてしまいました。被害届けは出しませんでした。なぜなら二人にとって、このような事は、何ともないのです。被害者という意識がありませんから、警察に行くなどという考えがありません。面倒は起こしたくないのです。老人は、すぐにだます事ができます。老人をだまして、それで平気で暮らしているのは最低な人間です。

それぞれの人生

だれにも、自分の命の長さはわかりません。あと少しとわかっても、その少しが一ヶ月か、半年か十年先かわかりません。人には、忘れるという便利なシステムがあります。だから生きられるのです。頑張れるのです。人生は取り返しのつかないことの

連続です。他人の事は見えても、自分の事はなかなか見えないものだからです。

おじいちゃんの人生は、おじいちゃんの物。おばあちゃんの人生は、おばあちゃんの物。私が変わえようと思っても、帰る事はできません。同居して二人の過去を知ると、私は悩みました。二人の過去の行動を恥じたり反省したり。失敗の連続を取り返そうと必死になりました。それは全てが無駄でした。なぜなら、二人は自分の人生が良かったか悪かったかなど考えていないからです。

「親の過去の生きざまを、あなたが恥じたり責任を感じたりする必要はない。大小あるけれど、だれでも失敗をしている。失敗の無い人はいない。僕なんか、毎日が失敗さ。失敗だらけの人生だよ。あなたも、僕も悪い事は何もしていない。堂々と生きて行こう。」

痴呆の親の介護をして、日々狭く小さくなって行く心に、夫の言葉は救いでした。

悪夢

葬儀がありました。香典を持った町中の人々が次々弔問に来ます。私は香典返しを渡して、「御迷惑をおかけしました」と頭を下げました。その繰り返しを千人にしました。次の日も千人、その次の日も喪服の行列が続きます。口々に「大往生だ、百歳万歳!」と叫んでいます。だれも悲しんでいません。泣いている人はいません。

水木しげるの漫画『ゲゲゲの鬼太郎』のネズミ男も頭に三角の頭巾をし、経帷子を着て数珠を持った死装束で来ました。「だれでも一度は死ぬ。よくある事サ。順番は時の運かな。『三途の川は独りで渡るもんで、ござんす』と、噂の木枯し紋次郎が言っていたが、またたまされるといけね工から、一番信用できる俺様が迎えに来てやったぜ」と言い、香典は出さず、香典返しだけ受け取って口笛を吹き、「あばよ」と上機嫌で帰

って行きました。通夜ぶるまいの料理をたらふく食べ、酒を浴びるほど飲んだようです。翌朝、夢の話をついにすると、「あなたの話には、よくネズミ男が出て来るね」と笑いました。

私が結婚して一年後、おばあちゃんの母親(たつ)が老衰のため他界しました。家から送る葬儀が、結婚後初めての大きな仕事となりました。町中のほとんどの人が来たので、香典返しがりなくなり混乱しました。受け取れなかった人には後日という事にしましたが、その場で怒りをあらわにし、受付の人に食ってかかる人がありました。香典返しの品は、おばあちゃんが考えたのでしょうか。毛布、シーツ、バスタオル、砂糖、お茶などが用意されていました。香典返しが多種類だったので、多い少ないと言って来る人もあり、さらに混乱しました。香典は、当時二千円か千円でしたが、中には五円の人もあり、驚いたのを覚えています。親戚の人たちが廊下に集まって香典の相談をしていました。「香典、いくらにした?」「これじゃあ少なすぎるなあ」「もっと入れよう。みんなが財布からお金を出していました。

読経の最中泣いていたのは私だけでした。私は涙がいくらでも出て止まりませんでした。オンオンと泣きました。泣いている私に冷ややかな視線が集まっているのを感じました。大勢の喪服の中、私だけが妊婦服でした。外の洗い場で、だれかが茶碗の入った箱につまづき、ガッシャーンという大きな音がしました。手伝いに来ていた近所の女の人たちの、けたたましい笑い声が大きく響きました。

私は最初の子を身ごもっていて、葬儀の手伝いは夫がしました。お腹のなかの子は葬儀から一ヶ月後、出産予定日を十日過ぎてへソの緒が首に巻きついて死産となりました。みんなが「祖母が連れて行ったのだ」と言いました。それは慰めになっていませんでした。だから葬儀は、こりごりなのです。ハクレンが咲くころになると毎年思

い出します。

戦争

フィリピン南部ミンダナオ島の山中で元日本兵とみられる男性二が生存しているらしいというニュースが世界中を驚かせました。敗戦から今年で六十年です。

ところで、おじいちゃんは、戦時中の事について、ほとんど語ったことがありません。ずっと以前、「出陣して九州まで行った所で終戦になった。南方に送られる所で終戦になった」と聞いたことがあります。おじいちゃんは、男としては背が低く、腕力がないので、徴兵検査が不合格だったのではないかと私は思いますが、それを今さら聞きただしてもなんの意味もありません。「相撲は一度も勝ったことがない」「白は、一人では持てない」と言っていました。国は徴兵検査で不合格だった者や、知識人は徴集を見送っていたが、最後は誰でも戦場に送りました。

アメリカ人のイーストウッド監督が作った渡辺謙主演の映画『硫黄島からの手紙』では、投降して捕虜になった日本兵を、見張り当番がいやだという理由だけでアメリカ兵が銃殺するシーンや、絶対絶命となった日本兵が手榴弾で次々自決するという、目を覆うようなシーンがある。現実にあった事です。

フィリピンのルバング島で生存していた元日本兵の小野田寛郎さんは、「いちばんつらかった事は、戦友が次々に亡くなった事です」「うれしかった事は、二十六年間一度もありませんでした」と言っていました。戦争は悲しい。何千何万の人が死んだ戦争を語るには、言葉がたりない。

失望する

私は、小学校三年生の時、父親に失望した。私は文を書くのが好きで、いつも書い

ていた。それは、好きというより、クセのようなもので、紙切れにメモのように書いて持ち歩いていた。

ある日、学校の作文の宿題を書いた。その作文は自分では会心の出来であった。最後の一行は、「なかなか、うまくまとまった」と思った。父親が見せるように言ったので原稿用紙を渡すと、「うまくまとまった」と思った一行を赤ペンで直した。私は、がっかりした。その一行は、今まで書いてある文のどんでん返しになる部分だったからだ。自分の親が、これだけの人物なのかと悟った瞬間だった。みんなから「先生」と尊敬され、「とうちゃん」と頼っていた人が、「ちっぽけな人」になってしまった瞬間だった。以後、心を開くことがなかった。同居していても父親との距離が、どんどん広がって行った。その時の作文の内容は、全く覚えていないのだが。

私が中学一年生の夏、母親が私に失望した。母親は「これからは、自分で何でも決めて、自由に生きて行くように。必要なお金は出すから」と言った。「あなたの言っている事が、よくわからない」「あなたの話は、つまらない」と言った。そして、同居していても母親との関係が切れてしまった。母親は私を生んで、他人に子育てをまかしていたことを悔いていた。自分が育てなかったから、私が曲がった子供になったのだと悔やんだ。中学生になった私の話に、全くついて行けないのだった。わが子を理解できないでいた。そして、翌年の三月、二十年勤めた小学校を退職した。そこから、子育てをやり直そうとしたが、それは、もうかなわなかった。無理だった。

けれども、自由になった私は嬉しかった。束縛から解放されて、自由だった。朝昼晩を外食し、ピアノ、バイオリン、声楽、作曲のレッスンに通い、レコードも本も、いくらでも買った。上野のコンサートにも毎晩のように足を運んだ。レコードプレー

ヤーもグランドピアノも買ってもらって、中学・高校・大学の学生時代を豪勢に過ごした。

それから、ずっと後になって、映画『男はつらいよ』(原作:山田洋次 主演:渥美清)は、「一作目が一番面白い」という話になった。私より十歳も若い、小学校の教師をしている人が、「寅さんなんて、ちっともおもしろくない。あんなもの嫌いだわ」と言ったので驚いた。その感覚は、小学校の教師であった私の父親や母親と同じだった。この笑いあり涙ありの人情物語を理解できないのが教師なのかと思った。思考力に柔軟性が無いのは、年齢とは関係がないように思った。

私が本を出版しても、新聞やラジオに出ても、童謡のコンサートをして、親が喜んでくれたり、ほめてくれたりする事はなかった。親は、「あの時」から私の事が理解できないままだった。普通の親のように、「よかったなあ、がんばれよ」と言ってもらいたかったのに。普通の会話がなかった。失望の時がもどる事は、もうなかった。親にも子にも、生きるゆとりがなかった。それは、賢い生き方ではなかった。

対話

対話は、勘違いと誤解の連続です。親と子、子と孫、夫と妻、家族、社会。だれもが、自分の言い分こそ正しいと信じています。正しい対話で世の中が進んでいると信じているので、喧嘩をしたり、落ち込んだり、不幸になってしまうのです。間違いだらけの対話で、この世の中は成り立っているものなのです。勘違いと誤解をしながら、これからも生きて行くのです。